取材／コムデザイン

一人ひとりの患者さんの問題をスタッフ全員が共有するがん医療。

日比聡さん、友松裕子さん、粥川哲医長、
古賀千晶さん、伊奈研次副院長、城川優子さん

愛知県がん診療拠点病院に指定された名古屋記念病院において、どのようにがん医療が実践されているのかについて取材させていただきました。

取材に応じていただいた方は、今回の指定のためのプロジェクト・リーダーを務められた伊奈研次副院長のほか、血液・化学療法内科医長 粥川哲先生、がん相談支援センターのソーシャルワーカー 友松裕子さん、化学療法の調剤・服薬指導を担う薬剤師 日比聡さん、がん性疼痛看護認定看護師 古賀千晶さん、がん化学療法認定看護師 城川優子さんといったがん医療の現場で活躍していらっしゃる方々です。

医療は、治療とケアの二つが重要な要素です。特に現在のがん医療は、新しい診断法、新しい手術手技、新しく高性能な医療機器の導入、抗癌剤を始めとする新薬の開発が日進月歩で進んでおり、医療の専門性が著しく向上しております。

がん治療の専門性が高度になると、今まで経験しなかった薬剤の副作用や非常に高価な分子標的薬剤などの使用による経済的負担を含めて、必ずしも患者さんにとっては優しくない医療になることがあります。そこで専門性の高いがん治療を下支えする、患者さん及びご家族の生活の質（QOL）に対するトータルなケアが重要となります。看護師や薬剤師、ソーシャルワーカー、栄養士は、それぞれに高い専門性をもって患者さんやご家族に対応し、患者さんの療養生活のケアを担っています。一人ひとりのがん患者さんに対して、医師だけでなく多職種が協力してチーム医療として取り組んでいるわけです。

がん化学療法をうける患者さんやご家族は、さまざまな副作用を含む苦痛を経験します。それらが最小限になるように、がん化学療法看護認定看護師が中心となりアセスメントを行い、問題に対するマネジメント能力向上のための支援を行っています。

薬剤師は、抗癌剤や麻薬の副作用について患者さんによく説明するとともに、現在、口内炎の予防や漢方薬を用いたしびれの軽減など、副作用による負担軽減のさまざまな取り組みを行っています。

がん患者さんは、診断がついた時から何らかの苦痛を経験していると報告されていますので、がん性疼痛看護認定看護師をはじめとする緩和ケア・チームのスタッフが患者さんに寄り添い、痛みや悩みを受け止めてそれを共有し、がん患者さんが治療を円滑に受けられるようにサポートしています。

ソーシャルワーカーは、時にはベッドサイドまで出向き、医療費などの経済的問題で悩んでいる患者さんやご家族と話し合い、問題解決に努めています。また、在宅医療や転入院などの療養先に関する相談をを行っています。また当院では、がん患者さんとそのご家族を対象として、定期的に月1回「がん患者・家族の集い」を開き（日時：第2金曜日　午後3時、場所：プレイス）、各職種の専門家によるミニ・レクチャーを行うとともに、がん治療体験者・長期生存者（ピア・サポーター）による相談会を開催し、がんで悩み、苦しむ方たちに向けてきめ細かく情報発信をしています。

そこでがん医療の現場で、チーム医療を実践する中で、最も大切にしていることをお聞きしました。

「チーム医療というのは、一人の患者さんあるいはひとつの医療に関して、全員が同じ土俵の上に立って、問題意識を共有することだと思います。医学用語や新薬の情報、社会的サポートなどの知識を身につけるために、医師だけではなく、看護師も薬剤師もソーシャルワーカーや事務職であるクラークも、一緒に勉強会に参加し、患者さんに関する知識や情報を共有できるように心がけています。外来化学療法室では、毎日朝夕に多職種によるカンファランスを行い、この患者さんがこういう状況である、と言ったときに皆が『あっ、そういうことだ』とお互いにわかりあえるように努力しています。」

さらに粥川哲医長は、こう付け加えました。「患者さんと医療者の間で、医療の目的・ゴールが揃っていることがたいへん重要だと思います。患者さんがどういう問題を抱えているかということを共有して、どこを目指して医療を行うのか。もちろん患者さんは誰でも1日でも長く命を保つことを望まれますが、病状によっては痛みを和らげることが最も優先される場合もあります。治療は苦しいけれどもとにかく長生きをしたい方とか、あるいはリスクが高いが、死を覚悟してでも副作用の重篤な抗癌剤の治療を受けたい方とか、皆様それぞれ事情が違います。」

医療者全員が、一人ひとりのがん患者さんと向き合って、細かいところまで情報を共有して、同じ方向を目指して最新・最善の治療を行う。そして多職種で協力して患者さん及びご家族のQOLを支えるためにトータル・ケアをしていく。このように名古屋記念病院では、さまざまな職種の専門家によるチームで、がん医療に取り組んでいます。粥川哲医長をはじめとする現場スタッフの情熱が伝わってきたインタビューでした。